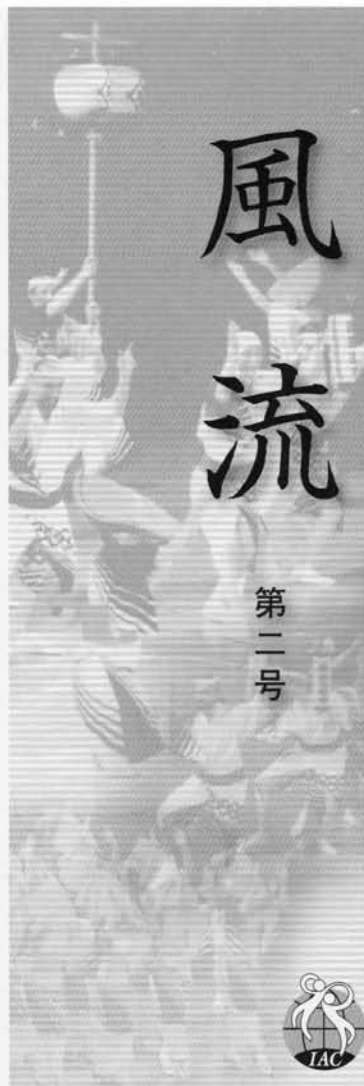


風流

第二号



民俗芸能の振興と継承の重要性

—日本人たる自覚をもつために—

理事長 山口洋一



六〇年にわたって戦後教育のよりどころとされてきた「教育基本法」が昨年一二月に改正され、「公共の精神」の涵養や「伝統と文化」の尊重、「国と郷土」への愛などが盛り込まれました。今年に入ってから、防衛庁が防衛省になりました。又、憲法改正への道はまだまだ遠いですが、少なくともその一里塚となる国民投票法はできました。

戦後六〇有余年にして、ようやくこうした動きがでてきたことは、遅きに失した感はないもの、われわれ日本人の国家意識という点で、好ましい方向への進展であることは疑いありません。

しかし、まだまだ多くの日本人の国家意識が、他国に例を見ないほど希薄なものにとどまっているという憂うべき実情は、根本的には変わっていません。

日本が独立自尊の国家として国際社会に伍していくためには、われわれ一人ひとりが日本人たる自覚をもち、日本の国民であること誇りに感じ、自国の文化を愛し、歴史への熱い思いを抱き、自国の名誉が傷つけられるような事態には強い反発を覚える、こうしたことが全て不可欠の前提となります。まさにこれが「国家意識」に他ならないのです。われわれが「国家意識」を失い、「附抜け」国民になり下がってしまったのは、日本はどうしようもなくなくなってしまっています。

なぜ国家意識が希薄になったのか

大東亜戦争敗戦のショックで茫然自失となった日本人は、アメリカの占領政策によってやすやすと洗脳され、この戦争は「ファシズム対民主主義の戦争」だったのであり、「日

本のやったことは一切間違い、戦勝国側は全てにおいて正しかったのだ」とする東京裁判史観を頭に叩きこまれてしまいました。この日本民族洗脳作戦は、日本サイドでも進歩的文化人と呼ばれる人々をはじめとして、占領軍のお先棒を担ぐ連中がその尻馬に乗り、当時のマスコミも、こぞって日本人のマインド・コントロールに加担した結果、難なく成功したのです。そして自虐的な歴史観がすっかり日本人の心に定着して、抜き差しならぬものとなってしまいました。歴史の長きにわたって、独立自尊の国家としての矜持を保ち続けてきた日本の国民は、敗戦後このようにして、あえなく「附抜け」になってしまったのです。物量において遙かに勝るアメリカと戦って敗北した日本は、夥しい数の尊い人命を失い、国土を焦土にされてしまいました。しかしそれに続く占領政策が、アメリカの目論見通り、日本人の「附抜け化」にまんまと成功し、戦後六十有余年を経て、今なおその後遺症が厳然と残されている現実を考えると、われわれにとっては、戦争で蒙った物理的打撃よりも、戦後のマインド・コントロールによる精神的衝撃の方が、日本をダメにする決定打となつたのではないのでしょうか。

総合的な資質に優れる日本民族

日本民族は世界一般の標準からすれば、非常に優秀な民族だと私は確信しています。知的能力だけではなく、情緒面での感性をも含む人間としての総合的な資質において、優れていることは間違いありません。しかも一部のエリートに止まらず、幅広い層にわたって優れた民族である点が日本の特徴だと言え

ます。

このことを証明するには、同じテストによる国際比較とか、知能指数の平均値を比べ合うとか、色々と客観的に割り出すやり方があるでしょうが、世界中を自分の目で見てきた外交官人生を通して、私自身、身をもって実感してきたこととして、確信をもってこれを断言できます。「ゆとり教育」などと言うアホなことをやったばっかりに、国際比較における日本の子どもが学力低下が起きていると言われていますが、それにしても日本民族の優秀性に疑いの余地はないのです。

それだけに、この優秀な日本民族が、僅か一回の負け戦ですっかり自信を喪失し、「附抜け」になってしまった体たらくは、なんとも情けなく、残念でなりません。

担い手としての「国際芸術家センター」

「こんなことでは日本が危ない！」私は、このような危機意識に苛まれて、居ても立ってもいられない焦燥感に駆られています。

われわれが日本人としての国家意識を取り戻すには、歴史の長きにわたって根付いてきた日本のアイデンティティーをここでしっかりと再確認し、世界に向けてこれを明示することが急務となっているのです。そして日本のアイデンティティーの核心となるのが伝統文化に他なりません。

市川団十郎一座によるバリ・オペラ座での「勸進帳」の歌舞伎公演が好評を博したのは大変に喜ばしいことです。雅楽、能、歌舞伎、文楽などの古典芸能や茶道、華道、文学、哲学などの分野で、われわれの先達たちが築いてきた豊かな遺産が、日本の伝統文化として

光り輝いています。これと並んで、民衆の生活や信仰と結びついて育まれてきた民俗芸能も、伝統文化の一翼を担う貴重な芸術であり、極めて重要な位置を占めているのです。

このような認識のもとに、「国際芸術家センター」は「日本民族舞踊団」を擁し、日本

全国各地に伝わる四季折々の彩りに溢れた民俗芸能を舞台芸術として昇華し、その成果を国内外での公演に生かしています。「日本民族舞踊団」の団員たちは、うら若い踊り手たちも、次代の文化使節を目指して特訓中の子どもたちも、指導にあたる先生方も、一人ひ

とり民俗芸能の振興と継承がもつ重要な意義を心にとめて、自分たちが担う使命を認識し、日々の厳しい稽古に励んでいます。これと併せて、「国際芸術家センター」は、国際相互理解の増進に通ずる世界平和への貢献を目指し、諸外国の民族芸能を日本に招致

して、国際文化交流の促進に努めています。このような事業を展開している「センター」の活動は、今日ますますその重要性を高めています。今後とも、会員各位の一層のご支援をお願いいたします。

イベント報告とアンケート結果

たくさんのご意見をありがとうございました

「NPO法人国際芸術家センター（IACC）のタベ」

四月十日に、文化シャッターBXホールに於いて開催した「NPO法人国際芸術家センター（IACC）のタベ」は、大勢のお客様にご来場いただき、盛況を呈しました。当日アンケート用紙を配布し、観客の皆様にご感想などを書いていただきました。そのいくつかを紹介したいと思います。お名前は匿名とし、全文でなく部分的に抜粋しました。また、各項目ごとに編集部からのコメントを付けました。

華やかで素晴らしい……（日本民族舞踊団の踊りについて）

● 舞踊団の踊りは素晴らしかったと思います。音楽も、本場のスタイルに近い再現をされていて、日本各地に根付く伝統芸能を、ステージ鑑賞に昇華される意義を強く感じました。

● 生で素晴らしい伝統文化を楽しませていただきました。（中略）特に伝統的な踊りが近代的テンポにより分かりやすく、見て楽しめるものになっていたことは、本当に素晴らしい会でした。

● とてもユニークな公演ありがとうございました。日本の心の原点とも言うべき祭りの数々を集めた踊りはとても楽しくて、海外で喜ばれるだろうと思いつつながら楽しませて頂きました。

編集部

日本民族舞踊団の公演を初めてご覧になった方々でしょうか。お誉めの言葉をいただけて喜んでおります。特に、地方の伝統的な持ち味を崩さず舞台芸術としてアレンジしている点を評価していただいて、意を強くしております。

かけ声から元気をもらおう……（個々の踊りの感想など）

● 「秋保の田植踊り」は、まず舞台衣装の華やかさに強く心ひかれました。豊作祈念の



写真：飯島 篤（株）エー・アイ（次ページも）

IACCの目指す「聖なる使命」について

四月十日の「NPO法人国際芸術家センター（IACC）のタベ」は、私にとつてIACCの公演を目にする初めての機会となりました。また、同時に日本の民族舞踊を鑑賞したことも、これがはじめての経験でした。私は東京の中目黒で生まれ育ったのですが、もし私が自然に民族舞踊に近いものに触れているとしたらそれは、小学校の時に習った中目黒音頭と、毎年夏に行われる祐天寺の盆踊り大会で踊られる東京音頭くらいだっただろうと思うのです。

あの日上演された演目は、私にとつて、初めて目、また耳にしたものでありながら、不思議と耳から入ってくる音楽はどこか懐かしく、なにか心地よく、徐々に体のこわばりもとれてゆき、音がすんなりと体に馴染んでいくのを感じました。そのような心地のよい音の中で、無駄を感じさせない洗練された動きや表情は、きつと昔の人たちの自然に對し敬意を払ってすごしてきた日常を紡ぎとつたものなのだろうと、その衣装の鮮やかさのごとく色を帯びて私の想像力を膨らませました。先祖代々日本という風土で育まれてきた伝統・文化は、時間を越えて私の

力でした。「傘踊り」「津軽じょんがら」「飾山囃子」は、笛、尺八、太鼓の生演奏の迫力と見事に呼応し、どこか懐かしい様な日本人の心の故郷を思わせるものでした。

● 印象に残っているのは、かけ声が入るもので、勢いがよくて元気をもらいました。一番いいなあと思うのは、三味線と歌と踊りのものでした。

● 舞台が近いのは親近感があってよかったです。身近に感じられるし、迫力がありました。

● 舞台が少々狭いように感じられ、踊りのスケールに比して小ささか窮屈な印象を受けました。また、舞台とそでが客席から見えてしまうため、踊り手の皆様の入りと出がスムーズでないが目立ってしまうのが残念でした。

編集部

個々の踊りについても簡潔で明快な批評をいただきました。舞台の広さについては、舞踊団本来の魅力が十分に発揮できないのではないかと懸念がありました。本質的な良さは味わっていただけたようで、安心しました。これからも、十分な広さと設備がある会場ばかり使えるとは限らないので、出入りを含め、場所に合わせた、周到な演出や準備を心がけたいと思います。

席が空いているのに立っている人が……（会場整理など）

● 会場整理の仕方が悪かったです。席が空いているのに立っている人がいたり、予備の椅子も少なかつたのではないのでしょうか。

● 入り口付近の席が埋まってしまって、空席が奥しかない状態なので仕方がないけど、会場の方で途中で「全体に席を詰めてください」というアナウンスを流すとか配慮をしたらどうでしょうか？

● ロビーで会員のお誘いをされていましたが、もう少しスマートにされた方が良いのでは？ 会員数を増やすことも大切だと思いますが。

編集部

会場整理には指摘されたように問題が残りました。客席の可動式の床をあげたために、後部からの出入りが出来なくなり、さらに上手舞台ぎわは音楽団の出入りに使用したため、下手舞台ぎわ一か所しか観客の出入りが出来ず、詰まってしまいました。事前のシミュレーションが不足でした。会員勧誘についてはご不快を感じられたようで反省しています。目下、会費収入が一番の財源なので、つい熱が入ってしまいました。ついでながら、この機会に、どうかお知り合いにお声をかけていただき、一人でも会員が増えますようにご協力をお願いします。

ヴァイオリンとバレエについて……（この催しの趣旨は……）

● ヴァイオリンとバレエによるパフォーマンスはユニークで良かったです。



写真(右から)
●秋保の田植踊り(宮城県)
●鬼剣舞(岩手県)
●傘踊り(鳥取県)
●日本民族舞踊団・音楽団
●津軽三味線と唄(青森県)
●津軽じょんがら(上)(青森県)
●津軽あいや(下)(青森県)
●飾山囃子(秋田県)
●公演後の歓談



無意識の中で思い出させているのかもしれないとすら感じたのです。

話は少し変わりますが、私は最近「国家の品格」(藤原正彦著)という本を読みました。その一説にこんな事が書いてあるのを見つけました。

「21世紀はローカリズムの時代」グローバル化によって、効率・能率に幻惑され画一化を進めてはいけない。そういう意味で、21世紀はローカリズムの時代で、世界の各民族、各地方、各国家に生まれた伝統、文化、文学、情緒、形などを世界中の人々が尊重し合い、育ててゆかなければならない。このローカリズムの中核を成すのが、それぞれの国の持っている普遍的価値であり、日本人が有する最大の普遍的価値は、美しい情緒とそれが育んだ誇るべき文化や伝統だ。というのです。

また、日本人にとって自然は神であり、人と自然が調和して生きてきたことにより、情緒が生まれ、その伝統・文化へと発展してきました。このようにして育まれた日本人のよき伝統・文化は、自然から人間が切り離され市場経済優先となってしまった現代の世界へ、今こそ日本人が発信してゆくべきで、そのことが「日本の聖なる使命」だということです。

私はこの文章を読んだ時、四月十日の「NPO法人国際芸術家センター(IAC)の夕べ」を思い出しました。今述べられているこの「使命」をIACは体現しているのではないかと思ったのです。私たちIACはこの使命に大きく貢献できる役割を担っていると自覚しています。日本の伝統芸能を舞台芸術として上演することを活動としているIACは、こうしたメッセージを言葉ではなく、生の音と演技で多くの人の心に訴えるだけの力を持ち、またそれは言

■事務局便り■

▶「アフリカのカボネン」が生んだ世界的なアーティストのピエール・アケンダンゲ氏が16名編成の音楽団とダンサーを率いて来日しました。その本番前日となる5月7日の渋谷オーチャードホールでのプレミア公演に、ガボン大使から国際芸術家センターの関係者に特別にご招待状をいただきました。当日は、アフリカ各国や中南米各国在日大使館のご招待客も目立ち、まるで外国のコンサート会場にいるような雰囲気でした。この日、ご来場くださったIAC会員の皆様の大多数が、私と同様にガボンの音楽とダンスに初めて生で触られたのではないのでしょうか。アフリカ的なエネルギー感の中にも醸し出される西洋的ともいえる繊細さは、アケンダンゲ氏がフランスを中心に音楽家・詩人として国際的な活躍をし、高い評価を得たためでしょうか。公演後のレセプションでは、会員の皆様も公演の余韻で興奮気味に、アケンダンゲ氏やアーティストたちと交流を楽しまれているようでした。



IAC関係者とピエール・アケンダンゲ氏（右から2番め）
写真：大塚弦

▶「第一回総会」 昨年10月にNPO法人となりましたIACは、6月22日初めての総会を丸の内国際ビルの日本倶楽部にて開催致しました。出席者数は26名（委任状含む）で、平成18年度の会計報告と19年度の事業計画や予算についての質疑応答がなされました。NPOとしてはまだまだ歩き始めたばかりですが、長い実績と経験を活かしてIACだからこそできる、IACにしかできない事業を会員の皆様のご支援をいただきながら行いたいと思います。

▶「日本との文化交流事業」を実現したいと、最近特にアフリカの国々からの相談が目立ちます。前述のガボンの他にもブルキナファソ、カメルーン、コートジボワール、エチオピアなどからの積極的な働きかけを受けています。アフリカという大雑把なくくりで捉えるのではなく、個々の地域、国がもつそれぞれの素晴らしい文化を各国大使館との協力で紹介していきたいと思えます。

▶「日本民族舞踊団」の舞台化には、地方調査と作品検討は不可欠です。しばらく活動がとどえていましたが、それを行う「制作室」を復活いたしました。当面は「三匹獅子舞」の調査を行います。会員の皆様にお届けする「制作室月報」をご覧ください、地方調査や研究会などへのご参加を大歓迎いたします。

(理事・事務局長 金屋輝美)

募集のお知らせ 詳しくは事務局にお問い合わせいただくか、ホームページをご覧ください。

- NPO法人国際芸術家センターでは、活動趣旨にご賛同・ご支援いただける法人、個人の会員を募集しています。
- 日本民族舞踊団では研究生を募集しています。体験レッスンも行ってまいりますので、興味のある方はぜひご参加ください。

IAC会報「風流」第二号 2007(平成19)年7月1日発行 (年4回、1・4・7・10月発行)

発行：NPO法人国際芸術家センター (IAC)

編集：「風流」編集部

〒156-0051 東京都世田谷区宮坂3-20-10-206

TEL：03-5426-2047 FAX：03-5426-2048

E-mail：iactokyo@d1.dion.ne.jp



NPO法人
国際芸術家センター
International Artists Center

<http://www.d1.dion.ne.jp/~iactokyo/>

●この日前半に演じられたヴァイオリンとバレエは、このような会の主旨のもとであれば尚さら、そぐわない違和感を覚えました。

編集部

前半の演目についてはアンケートに賛否両論がありました。私たちが「IACの夕べ」で意図したのは、理事長の講演を挟んで、前半は、日本の芸術家たちが普段行っている活動そのままを海外に行き演じて現地の人々に受け入れられたことを報告すること、後半は、日本固有の伝統芸術である民族舞踊を演じること、この二つにより全般的なIACの活動を理解していただくことでした。しかし、説明が不十分だったために、私たちの意図がしっかりと伝わらなかった憾みがあります。これについては反省しなければなりません。ただ、私たちは前半に出演されたお二人がアラスカのシトカで行った公演と学校や病院でなされた交流活動を高く評価し、今後同様に芸術家たちを海外に派遣したいと思っています。



●ヴァイオリン演奏と創作バレエのパフォーマンス

業以上の強いメッセージを人の心に残すことが出来るはずだと思っております。日本人として誇り高くこの「聖なる使命」を果たしつつ、さらには他国で同じように使命を抱く人々の架け橋となつて、その文化・伝統に理解を示し、そこから多くを学んでいくことで平和の輪を広げてゆく。これが出来れば国際社会の中で本当に意味のある役割を果たすことが出来るのではないかと思います。(事務局長補佐・喜多川景子)